

〈結果〉の分詞構文, その意味上の主語について

和泉 爾

1. はじめに

今年の神戸大学前期試験の大問 I を見て皆さんは驚きませんでしたか. というのも, 昨年に続き, 下線部和訳問題で分詞構文が出題されていたのです. しかも, この分詞構文には非常に興味深い特徴があります. 通常, 分詞構文では主文の主語と分詞構文部分の主語が異なることはありません. 異なる場合は, いわゆる独立分詞構文として, -ing の前に主文における主語とは異なる主語を置かなければいけません. ところが, 2014 年前期の大問 I の英文を見ると, 次のようになっています(出題箇所は下線部).

Perhaps one country was secular while the other was highly religious. Perhaps one had more advanced medical care, and better success rates at organ transplants, than the other. Perhaps the rate of accidental death was higher in one than another, resulting in more available organs⁽¹⁾.

下線部に *resulting* で始まる分詞構文がありますが, 動詞 *result* の意味上の主語は何なのでしょう. 主文の主語である, *the rate of accidental death* でしょうか. そもそも, *A result in B* という表現は, 「A が原因で B という結果が生じる」という意味で使われます. 結果にあたるのは *more available organs* の部分で, 「利用できる臓器がより多い」ということを指しています. ではその原因は何でしょうか. 主文の主語である, *the rate of accidental death* だけではつじつまが合いません. 「他の国よりも事故による死亡率が高い」ということが原因で, 利用できる臓器が多くなるわけですから, *resulting* の主語は主文の主語でなく, 主文全体ということになります. ここでこの英文のポイントを整理すると,

- 1) 分詞構文として使われている -ing の意味上の主語は, 主文全体.
- 2) 前にある主文が原因で, その後に続く -ing 以下で〈結果〉が示される.

2. 2 種類の〈結果〉の分詞構文

各社の総合英語参考書を見比べると, 〈結果〉を表す分詞構文の扱いは大体 3 種類に分けられます.

- 1) そもそも分詞構文の分類に〈結果〉が含まれていないもの
- 2) 〈結果〉の分詞構文と思われるものを〈付帯状況〉(または〈連続〉)に分類しているもの
- 3) 〈結果〉の分詞構文と明記しているもの

それぞれの会社でそれぞれの判断があるので, どれがまちがいでどれが正しいなどとは一概に言えませんが, 欧米の文法書や語法書ではどのような扱いになっているのでしょうか.

たとえば, *Oxford Learner's Grammar* (OUP, 2005) は, 〈時〉や〈理由〉を表す分詞構文について述べた後で, その他の分詞構文のいちばん最初に〈結果〉(*result*)の分詞構文として次のような例文を挙げています.

They pumped waste into the river, killing all the fish. (= ... and killed all the fish.)

かつこの書き換えからもわかる通り, -ing の主語は主文の主語と一致します.

また *Practical English Usage* (OUP, 2005) では, 分詞構文には〈条件〉, 〈理由〉, 〈時間関係〉, 〈結果〉などがあると述べた後で, 次のような例文が挙げられています.

It rained for two weeks on end, completely

ruining our holiday.
(=... so that it completely ruined our holiday.)

まずこの文でわかるのは、分詞構文が *so that ...* という〈結果〉を表す表現で書き換えることができるということです。続いて、*ruining* の意味上の主語が主文の主語であると解釈しようとする、主文の主語は天候を表す *it* なので、その考えは否定され、主文全体が主語としか解釈できなくなります。

『総合コミュニケーション英語文法』(大修館書店、2008)にも、主文全体が *-ing* の意味上の主語となる例文が挙げられています。

Late frosts came, completely ruining the crops.
(=... and it completely ruined the crops.)
(遅霜が降りて作物が完全にだめになってしまった)

かつこの書き換えで、単数形の *it* は *late frosts* という複数形の名詞を受けることができないため、*ruining* の意味上の主語は主文全体と考えられるようだとわかります。

これらを総合的に判断すると、〈結果〉の分詞構文には下記のように、2種類あると言えます。

- 1) *-ing* の意味上の主語は、主文の主語に一致
- 2) *-ing* の意味上の主語は、主文全体

しかし、一歩引いて考えてみると、分詞構文とは前後関係を曖昧にするために使われる構文ともいえるわけで、だからこそ同じ *-ing* が、〈時〉、〈条件〉、〈理由〉などさまざまな意味を表すことができると考えられます。そういう観点から、今問題としている〈結果〉の分詞構文の主語はこれだと決めつけてしまうことは避けるべきかもしれません。

MyGrammarLab Advanced (Pearson, 2012)では、主文と分詞構文部分の主語が一致しているという条件で分詞構文(理由、条件、結果など)を使うことができるとした後で、〈結果〉を表す分詞構文の用例とその書き換えがされており、これを見ると非常に興味深いことがわかります。

FULL CLAUSE

The corporation shut down the plant, with the

result that many workers were left unemployed.

PARTICIPLE PHRASE

The corporation shut down the plant, leaving many workers unemployed.

この書き換えでおもしろいのは、主文の主語と分詞構文部分の主語が同じものと言っておきながら、書き換えられた *FULL CLAUSE* の文では主語が同じ2文を並べずに、*with the result that* というフレーズでつないでいるということです。この *with the result that* というフレーズは主文の主語を修飾しているというよりはむしろ、主文全体を修飾していると読めます。もしそうであるならば、分詞構文中の *leaving* の意味上の主語は主文全体という解釈が成り立つのではないのでしょうか。

3. 〈結果〉の分詞構文で使われる動詞の特徴

さて、ここまで扱ってきた分詞構文はなぜ、〈結果〉を表すと解釈できるのでしょうか。分詞構文そのものに〈結果〉の意味があるのでしょうか。それとも、〈結果〉と解釈できるのには他の要因があるのでしょうか。

Frank (1993)は、結果を表す分詞構文は、*thus* や *thereby* といった語とともに使われることがあると指摘し、この分詞構文の意味上の主語は主文での主語ではなく主文全体であると主張しています(注1)。

6. Result

He contributed a large sum to the library, (thus) making possible the purchase of some badly needed books.

The participial phrase of result may begin with **thus** or **thereby**. Appearing in end position only, this kind of phrase refers back to the entire statement, not to a single noun. Although frequently used, such a participial phrase is not acceptable to all authorities.

しかし、*thus* や *thereby* といった語がなくても、〈結果〉の分詞構文は十分成立できると考えられます。なぜなら、分詞構文に使われている動詞が因果

関係を表すからです。

これまでの例文中に使われている動詞は、下記のような書き換えが可能です。

S result in A = S cause A

S kill O = S cause O to die

S ruin O = S cause O to be spoiled

S leave O C = S cause O to be C

関西外国語大学教授の岡田伸夫氏(執筆当時は大阪大学教授)はあるサイト上で、Frank (1993)の引用とともに、この〈結果〉の分詞構文の例を7つ挙げています(「参考にしたサイト」参照)。そこで使われている動詞のいくつかを挙げ、さらに因果関係がはっきりとわかるように書き換えてみると、

S make O C = S cause O to be C

S give O1 O2 = S cause O1 to have O2

S suggest that S' + V' = S cause the fact that S' + V' to be known

S lead to A = S cause A

S result in A = S cause A

因果関係を表す動詞といえば、いわゆる無生物主語構文に用いられる動詞が頭に浮かんできます。そこで、大学入試問題の中から、いくつかそういった用例を挙げてみましょう(下線は筆者による)。

The University of Southern Maine in September banned smoking in its dormitories, forcing smokers to walk at least 50 feet away from the buildings to light up. Next fall, they'll have to go even farther. (2009年成城大学²⁾)

Only six or seven thousand years ago—a period that is to the history of the earth as less than a minute is to a year—civilization emerged, enabling us to build up a human world, and to add to the marvels of evolution marvels of our own: marvels of art, of science, of social organization, of spiritual attainment. (2006年奈良女子大学前期, 1996年大阪大学前期³⁾)

A few years ago he switched to color, enjoying its intensity, and began turning images right-side up with a prism. Replacing film with a digital sensor, which is more light sensitive, he cut exposure times from hours to minutes, permitting him to capture clouds, shadows, and other fleeting images. He is most excited about his work with a tent, which he uses as a portable camera obscura that he takes to rooftops or parks or city streets to project images directly onto the ground, giving his latest photos a wonderful rough surface. (2012年立教大学⁴⁾)

But there are several factors that work against comic strips, preventing them from becoming a true art form in the mind of the public. (1998年高千穂商科大学(現 高千穂大学)⁵⁾)

Somewhere in Africa, sometime about 6 million years ago, a population of apes became separated from its species. The new group evolved and split into still other groups, leading eventually to several different species of erect apes of the genus Australopithecus.

(2010年関西大学⁶⁾)

これらの用例の中には、分詞構文部分の意味上の主語を主文全体としてしか解釈できないもの(立教大学や関西大学など)があります。

では最後に、神戸大学 2013 年前期の大問 I を見てみましょう。下記英文で分詞構文が問われています(網かけは筆者による)。

The results have provided clues about the origins of chimps' gestures, suggesting that they are a common system of communication across the species, rather than each movement being a learned custom or ritual within one social group⁷⁾.

2014 年よりも難易度が高い英文ですが、問題は suggesting の意味上の主語は何かということです。可能性は次の2つです。

- 1) 主文の主語である, the results
- 2) 主文全体

主文の主語である the results は, これまでに行われてきた実験や研究でわかったことを指すと考えられます。主文全体が suggesting の意味上の主語なら, 「それらの実験結果によってチンパンジーのしぐさの起源について手がかりが得られ, その結果 that 以下のことがわかった」というように読めます。

4. むすび

私が生徒達に以上のことを解説するならば, 「主文全体を意味上の主語とする〈結果〉の分詞構文というものがある。認めない人もいるようだが, 実際に使用する学者がいて, ネット上のニュースサイトなどでも頻繁に目にする。その存在を仮に認めないとしても, 『～して, その結果…した』というように訳しておけば問題はない。なぜなら『その結果』の『その』が『主文の主語を指すのか, 主文全体を指すのか』は読む人に委ねられるからだ。少なくとも, -ing に使われている動詞の意味から考えて, 主文と -ing 以下に因果関係があるということはしっかりと押さえてほしい」と伝えるでしょう。

注1: Frank (1993)の指摘は注目に値すべき点がありますが他にもあります。この引用の数行前では〈様態〉や〈手段〉の分詞構文の用例を挙げています。

3. Manner

He came to the library looking like a bum.

4. Means

He earns a living driving a truck.

〈手段〉の分詞構文については, Quirk et al. (1985)でも次のような書き換えが示されています。

Using a sharp axe, Gilbert fought his way into the building. [‘By using a sharp axe, ...’]

出典元(入試問題で改変の可能性あり)

- (1) Duncan J. Watts. 2012. “Everything Is Obvious: Why Common Sense Is Nonsense,”

Atlantic Books.

- (2) http://enquirer.com/editions/2002/12/14/biz_campusmoking14.html
- (3) Jonathan Schell. 1988. “The Fate of the Earth,” Avon Books.
- (4) <http://ngm.nationalgeographic.com/2011/05/camera-obscura/oneill-text>
- (5) Charles Monroe Schulz. 2010. “My Life with Charlie Brown,” University Press of Mississippi.
- (6) <http://www.uboeschenstein.ch/sal/Tomasello1.html>
- (7) http://news.bbc.co.uk/earth/hi/earth_news/newsid_9475000/9475408.stm

参考文献

- 岸野英治(2008)『総合コミュニケーション英語文法』大修館書店。
- 早瀬尚子(2002)『英語構文のカテゴリー形成：認知言語学の視点から』勁草書房。
- Eastwood, John. 2005. “Oxford Learner’s Grammar,” Oxford University Press.
- Foley, Mark & Hall, Diane. 2012. “MyGrammar-Lab Advanced,” Pearson.
- Frank, Marcella. 1993. “Modern English: A Practical Reference Guide,” Regents/Pren-tice Hall.
- Quirk, Randolph et al. 1985. “A Comprehensive Grammar of the English Language,” Longman.
- Swan, Michael. 2005. “Practical English Usage,” Oxford University Press.

参考にしたサイト

- ・ <https://www.biseisha.co.jp/lab/lab1/48.html>

(大阪国際大和田高等学校教諭)